



動物病院でのアニマルレイキ利用例について

浴本涼子

動物病院で膀胱炎と診断された犬2頭と猫1頭および、腫瘍の肺転移と診断された犬1頭にアニマルレイキを利用しました。モデル動物は、膀胱炎と診断されたミニチュアシュナウザーのリック、トイプードルのモコ、雑種猫のよっしーと、腫瘍の肺転移と診断された柴犬のけいです。

1例目はミニチュアシュナウザーのリック、未去勢♂ 13歳 です。

2015年12月14日に食欲はあるが、元気がないとの主訴で来院されました。高血圧、腎機能、肝機能の低下、貧血があり、これらの治療を開始し、二日後の12月16日に吐き気と下痢を発症、血液検査により膀胱炎と診断、治療を開始しました。

食欲は少しあるものの、どんどんと元気がなくなっていました。腎機能を示す数値も2日間でさらに上がっています。血圧は高い状態が続いています。

日に日に元気がなくなり、病院スタッフもとても心配していた12月16日に、アニマルレイキを1回目30分、2回目10分、合計40分行いました。

2回目のアニマルレイキの後、それまでずっと寝てばかりだったのが、ときどき頭をあげて、あくびをするようになっていました。アニマルレイキ前は瞬膜が少し出ていて、目の開きも小さく、目に輝き、力がありませんでしたが、アニマルレイキ翌日は、瞬膜も出ておらず、目の開きも大きくなり、少し目に力と輝きが感じられました。また、看護師も「1度血便が出たが、昨日よりほんの少し元気が良い、今すぐどうこうになってしまう感じではない」と言っておりましたので、変化を感じたのは自分だけではないのだ、と思いました。また、17日をピークに、腎機能、肝機能を示す血液検査の数値も下がり始めました。

日に日に元気がなくなっていたリックに、アニマルレイキをしたことで、病気の状態が上向ききっかけに貢献したと思われました。かなり痛いひびきを感じられ、40分ではなくならなかったのも、もっと長時間アニマルレイキをしたかったです。様々な事情から、長時間のアニマルレイキを病院でやるのには限界があると感じました。

2例目はトイプードルのモコ、去勢済み♂ 14歳 で、現在、クッシング症候群の投薬治療中です。

2015年12月21日 連日明け方に呼吸が荒く舌を出す様子が見られ、軟便とのことで来院。前日夜は食欲もありませんでした。血液検査の結果、膀胱炎と診断、治療を開始しました。

モコへのアニマルレイキは、来院翌日の12月22日に45分間行いました。

アニマルレイキの前も後も、丸くなって寝ており活気に差は見られませんでした。アニマルレイキ後はぱっちり目が開き、少し輝きが感じられました。

アニマルレイキをした翌日から、すこし元気が出ており、リック同様、病気の状態が上向ききっかけに貢献したと思われました。

3例目は雑種猫のよっしー、去勢済み♂ 13歳 です。

2015年10月に慢性腎不全と診断。現在は自宅にて皮下補液を継続中です。



2015年12月7日に、2日前からつまむ程度しか食べない、口をくちやくちやしているという主訴で来院。血液検査で膵炎と診断、治療開始しました。

猫の膵炎は犬のようにはっきりとした症状がなく、わかりにくいと言われています。よっしーも、何となく食欲がないということ以外、下痢や嘔吐もありませんでした。

よっしーへのアニマルレイキは12月8日に20分、12月9日に20分、2日間続けて行いました。アニマルレイキ前後で目の輝きなどに違いが感じられませんでした。2日間アニマルレイキを行った翌日の12月10日夜から、自宅でもご飯を食べるようになり、だんだんと食べる量が増え、13日から自宅療養となりました。

2日間とも、ケージの奥にぴったりとくっつき、体勢を変えることもなくじっとしていたので、少しでもリラックスしてくれたらいいな、との思いでアニマルレイキを行いました。また2日目は、もう少しリラックスしてほしいと思うと同時に、こういう怖がりな猫だからこそ、安心出来る家で飼い主さんの手でアニマルレイキが出来れば、病気の回復がもっと早まるのではないかと思いました。

4例目は 柴犬のけい、♀未避妊 14歳 です。

2015年10月に、炎症性乳癌と診断。2015年12月9日に元気、食欲がないと来院。呼吸がとても早く、舌も白く、レントゲン撮影を行い、肺全体に病変があり、癌の肺転移と診断されました。

けいへのアニマルレイキは来院当日の12月9日に20分を2回、計40分行いました。

1回目は背中から肺を包み込むように20分、2回目は頭と胸と最後肋骨の後ろあたりのお腹に合計20分、アニマルレイキを行いました。

1回目のアニマルレイキ中、けいは落ち着いて寝てしまいました。2回目は呼吸が少しだけ深く、落ち着いたように思いました。アニマルレイキ後、目に少し輝きに戻ったような気がしました。

けいは、飼い主さんから、「元気も食欲もないなら何もできないから、死ぬまで病院で預かってほしい」と依頼され、お預かりした翌日の未明に亡くなりました。飼主さん自身の手でアニマルレイキができれば、飼主さんの元でなくなることができたのに、飼い主さん自身が何も出来ないとおもうこともなかったのに…と、とても残念でなりませんでした。

動物病院ではありませんが、結膜炎になった愛犬ゴン太へのアニマルレイキについても報告いたします。

愛犬ゴン太はチワワの去勢済みの♂、2歳で、今まで大きな病気をしたことはありません。

そんなゴン太が、朝起きたら、右眼を痛そうに閉じています。涙が多く、結膜の充血と腫れがありました。アニマルレイキしても良くならなかつたら病院へ連れて行こうと思い、まずアニマルレイキを始めました。

1回目は右眼に35分、2回目は右眼20分、アニマルレイキを行いました。

アニマルレイキ前は痛そうに右眼をしばしばさせており、大きく開けることはありませんでした。アニマルレイキ直後は目がほんの少し開くようになったただけでしたが、2時間後にはぱっちり開き、涙も少し減り、夕方には、時々、目をしばたたかせることがあるものの、ほぼ正常な状態になりました。

ゴン太へのアニマルレイキを行い、症状が改善されたので純粋にとっても嬉しかったです。そして、自分を癒やしてくれる存在であるペットの体調不良の際に、自分の手で出来ること



ANIMAL REIKI ASSOCIATION
Harmonize the Earth with Animal

があるというのは、とてもすばらしいことだと思いました。また、アニマルレイキができると、いつか来るお別れの際に、後悔なくお別れができるのではないかと考えています。

最後に、アニマルレイキの活用法についての考察です。

アニマルレイキ中の動物たちは、非常にリラックスしています。そのような表情を見ることができると、私自身とても幸せな気持ちになります。このように、アニマルレイキはお互いを癒やすことができ、ペットと飼い主との絆がより深まると考えています。

また、動物病院でのアニマルレイキの利用法としては、動物を押さえる保定や、入院時のリラックスに、皮下点滴の際、輸液剤や点滴部位に行く、などが考えられます。アニマルレイキは動物に対して負担にならず、リラックスできるので、ターミナルケアにも活用できると考えられます。

そして何より、肺炎と診断された3例においては、アニマルレイキを機に、ゆっくりとではありますが回復に向かったので、治療の補助として有効であると考えられます。このように様々な活用法があるアニマルレイキが、もっと広まっていくことを願っています。

ゴン太の写真

アニマルレイキ前↓



2時間後↓



2回目後→

